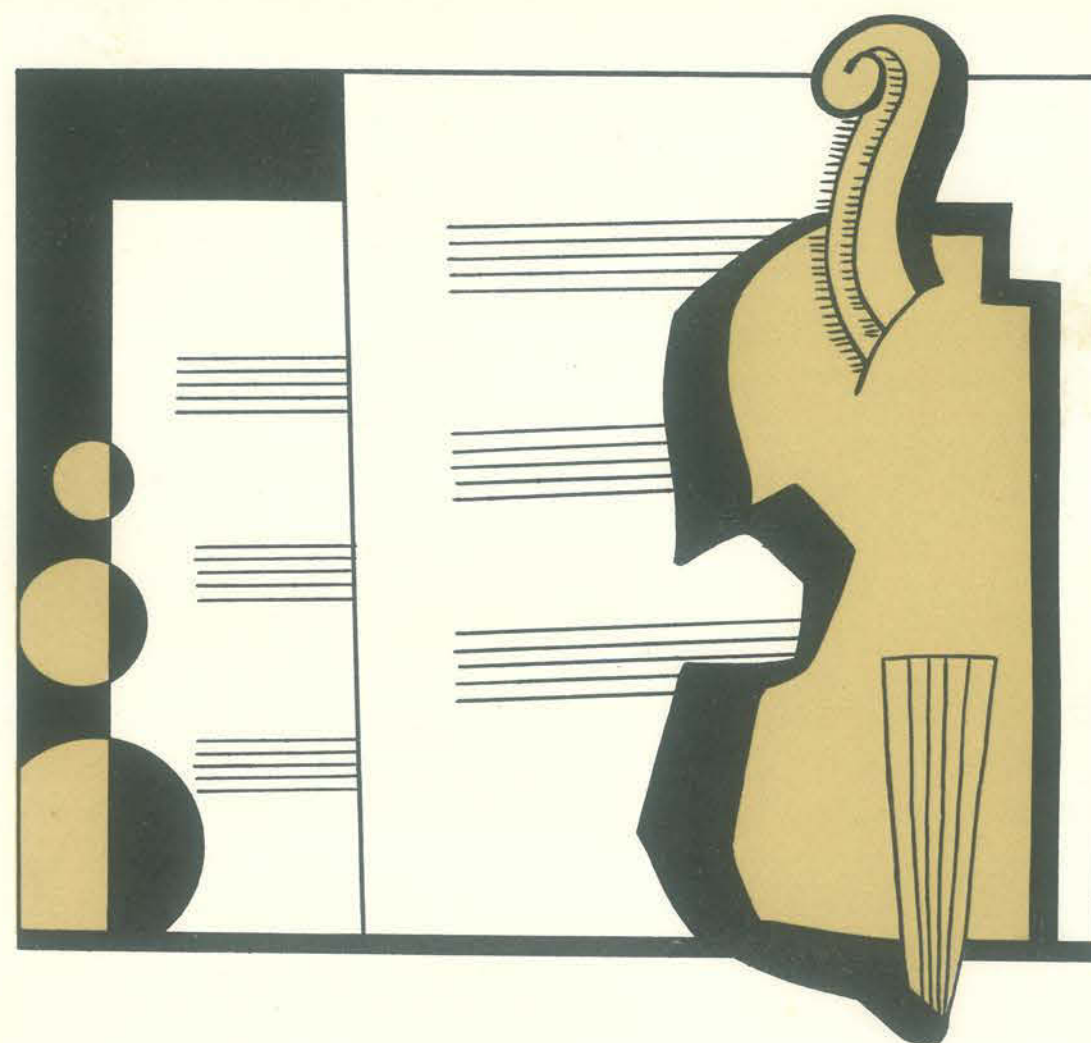




丘の歌

商 神

^f
 商 シン ア ヤ ナ ス ツ バ サ マ ア ゲ テ
 レ イ 枝 ハ ル カ ニ ヒ ガ シ ヲ サ セ バ
 リ シ キ コ ノ ミ ハ ク モ マ ヲ モ リ テ
 ア キ ツ シ マ ネ ニ オ ツ ト ゴ ミ エ シ ト
 コ ロ ハ コ ヨ ゴ キ ク ス オ カ フ ル ミ
 ナ ト ガ ハ ラ ノ キ カ キ ホ ト リ ニ
^f
 カ ク ツ リ ハ リ シ ア メ ノ サ ト シ モ
 ヒ ト ハ サ ト ラ テ イ ク ト セ カ ヘ ス
 Ritardando

商 神

(一)

商^{アヤ}神彩なす翅をあげて 靈杖遙に東を指せば 靈^{コノミ}しき果實は雲間を漏りて 秋津島根に落つとぞ見ゆし
 所はこゝぞ菊水かなる 湊河原の近きほとりに かく傳はりし天のささしも 人ばささるゝ幾年か経ぬ

(二)

神^{イブキ}の息吹のこもりて成りし 靈果いかで^{ツチ}の地に朽つべき トヨサカ 豊榮昇る朝日のかけに 八洲の外に潮風吹きて
 いつしか催す氣運に乗じ わが學舎ぞ世に生れたる 眠る商界夢さますべき 使命は天の授けし所

(三)

此所摩那の山六甲の峰 連り亘る山ぶさころに 數の若鷹はぐくまれ居て 靜にうかゞふ雲の行きかひ
 朝^{アシタ}妙なる琴のひゞきは 敏馬の濱に松を吹く風 ユフベ タやさしき舞の姿は 茅渚^{ウラハ}の浦曲に白帆行く影

(四)

希望に満てる春の潮の 寄せてはかへず清き渚^{ナギサ}や 熱誠もゆる夏の盛を いたはる風の葦合の里
 須磨や明石をわけて照るらん 月には物のあわれをぞ知る 冬は凍たる^{ウシロ}後の嵐 奔馬空行く勢示す

(五)

夫れ山水の秀靈の氣は 偉人傑士を起たしむるかや 天の使命を胸に收めて 清き自然に抱かれながら
 筋骨鍛へ智徳を研ぐ 切磋琢磨の四年の春秋 養ひ得たる鬱勃の意氣 抱負を語れや千餘の年のこ

(六)

金甌無缺の三千餘年 かゞやく光は銀の響 心はおなじ大和男子の 我等は牙籌を執つて起らむ
 日出づる旗を高くかざして 日入らぬ國を手に携へて 目ざす平和の戦^{イクサ}の場に 匂ふ御國の花ぞ咲かせむ

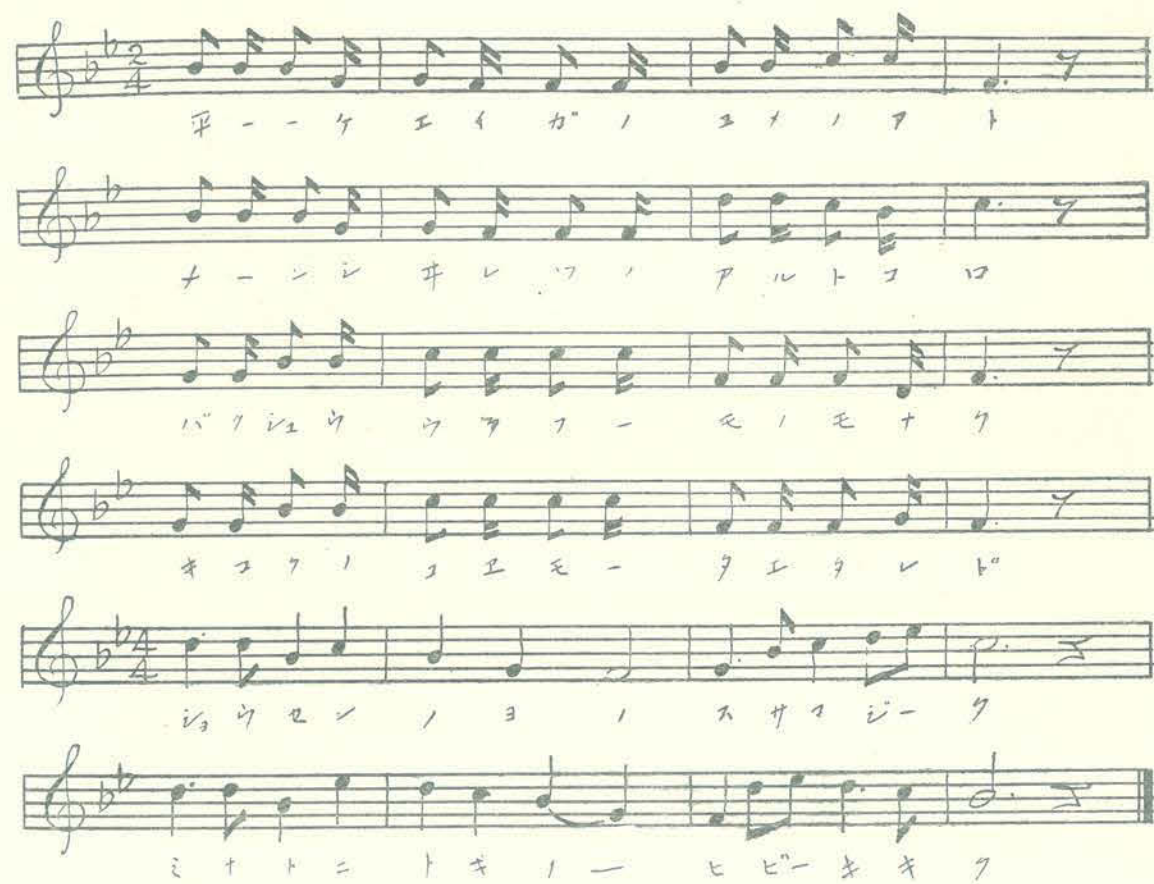
(七)

雄飛の時ぞと時離れて 野に立出づる蒼鷹幾羽 爪も研ぎぬ力も足りぬ ヒロ 尋にも餘る翅を張れば
 枝の百鳥皆^{キツ}惜れ伏す 扶搖萬里の風を起して おのが向々東に西に 雲に突き入る勢見よや

(八)

あゝ芳^{カサ}はしき櫻の國の 咲くや此花難波津近く 帆船黒船出入しげき イヅイリ 神戸は我等の北溟なるぞ
 鴨翼圖南の時至る迄 いざや靜に學び修めて 祖國の榮を我等祈らん 我等の榮を神に祈らむ

大 旗



一 (神 戸)

平家榮華の夢の跡 楠氏遺烈の在る處 夢秀誇ふ者も無く
 鬼哭の聲も絶へたれば 商戦の世の凄まじく 港に呐喊の響聞く

二 (學 校)

衛の東へに見る 鐵城壯麗の二層樓 激瀾の波、脚に寄せ
 嵐翠の山、脊に在り 世の嵐をば隔つれば 是ぞ健兒等苦闘の地

三 (世 潮)

文明の風襲ひ來て 孤島桃李の夢破れ 俄に覺めし諸人は
 舉措を失して彷徨し 奢に流れずば悔に達し 奇に偏せずば粗に失す

四 (意 氣)

浮薄の世潮低う見て 五百の健兒雄伏せり 囊中の錐、未脱し
 斬馬の劍、腰に鳴る 机上空論何か有る 章句の末枝主義ならす

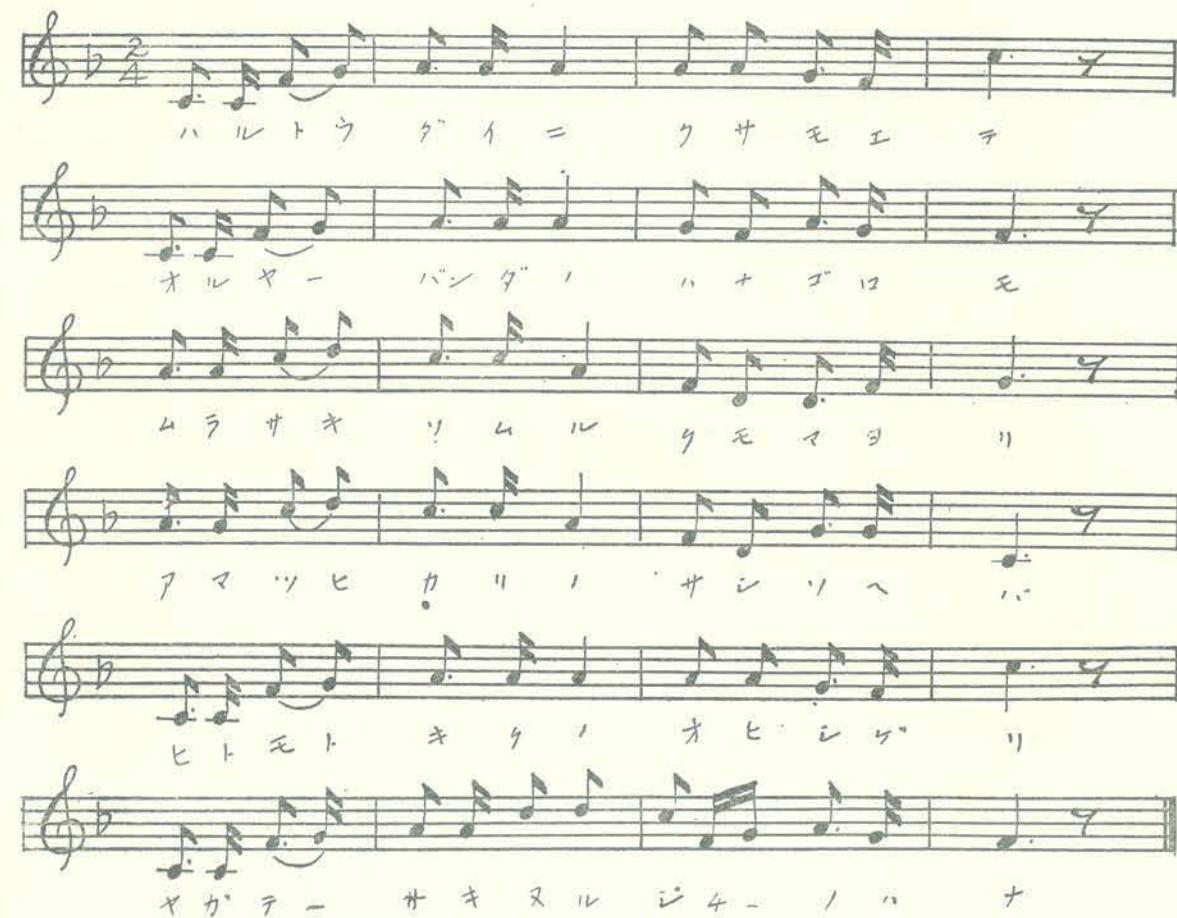
五 (機 會)

啓示の光影清く 向上の駒嘶けり 怪風豁然起りなば
 圖南の翼、鵬は一搏 暗雲疊々漲れば 登天の飛龍只一躍

六 (目 的)

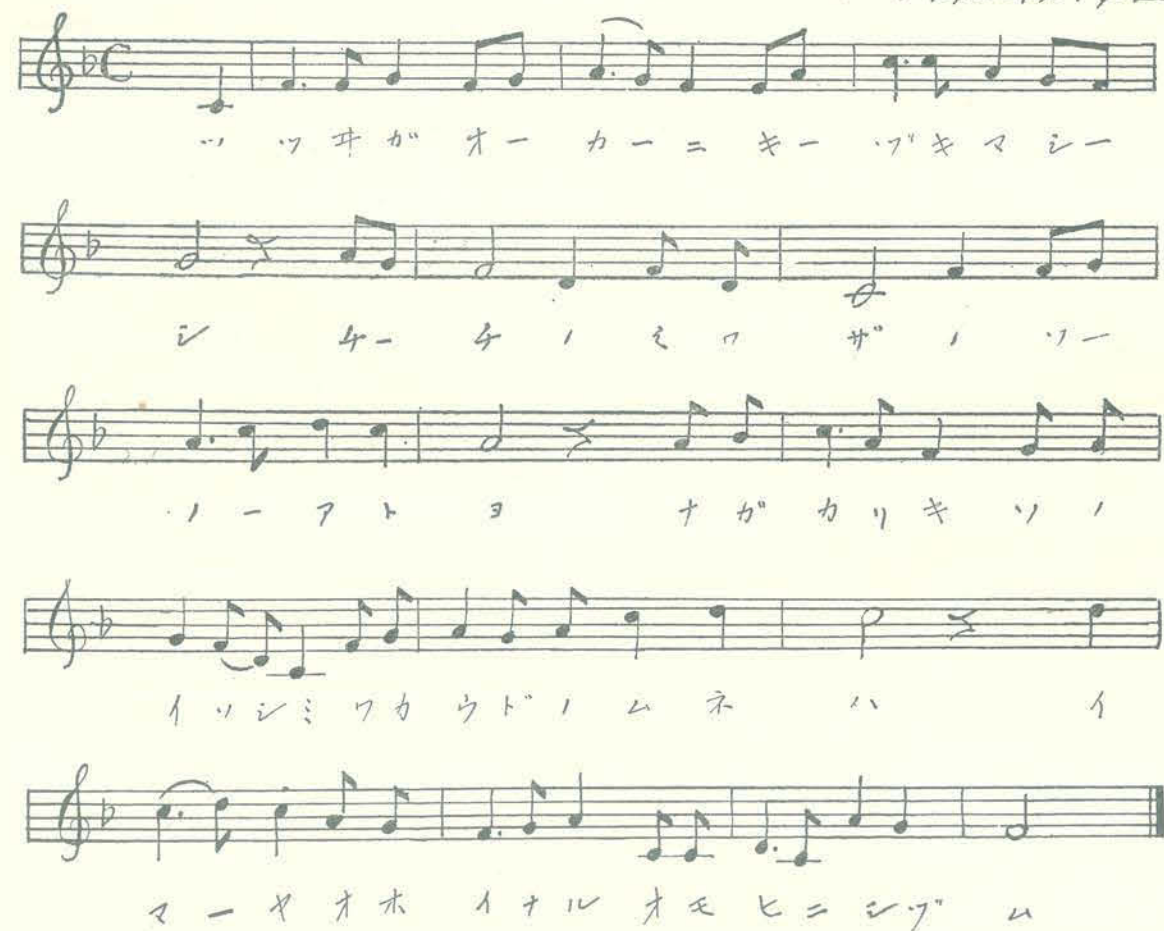
男兒一たび立たん時 阿修羅の如くなげびて 陸吹く風に海風に
 大旗翻し進みなむ 商戦場の只中に 高く凱歌を揚ぐるぞ

寮 歌



- (一) 春筒臺に草萌はて 織るや萬葉の花衣 紫染むる雲間より
 天つ光のさし添へば 一本菊の生ひ茂り やがて咲きぬる自治の華
- (二) 見よ曉の明星の 下界の眠深き時 永劫不滅の光もて
 告ぐる啓示を君知るや 立てよ吾友自治の華 理想の岸に咲かせなん
- (三) 佛母山下の逍遙に 仰ぎて思ふ師の教訓 茅渚の浦飛ぶ白雲に
 問はば故郷の父母如何に 今 盤雪の青年が 伏す龍池の四春秋
- (四) 夏曙の空の色 秋蕭條の雨の夕 二層の樓の欄干に
 剛毅の士氣を鼓舞しつゝ 血は紅の若人が 期する經世の策や何
- (五) 嗚呼 徐に機熟し 大牙一度動く時 全寮只是一心の
 百騎の前に何かある 菊の下行く溪水は 匂流さむ萬代に

水島鉄也先生頌徳歌 山中一郎作歌 田中銀之助作曲



(一)

筒井ヶ丘に築きまし 慈父の御業のその蹟よ 長かりきそのいそしみ
 若人の胸は 今や大いなる 思ひに 沈む

(二)

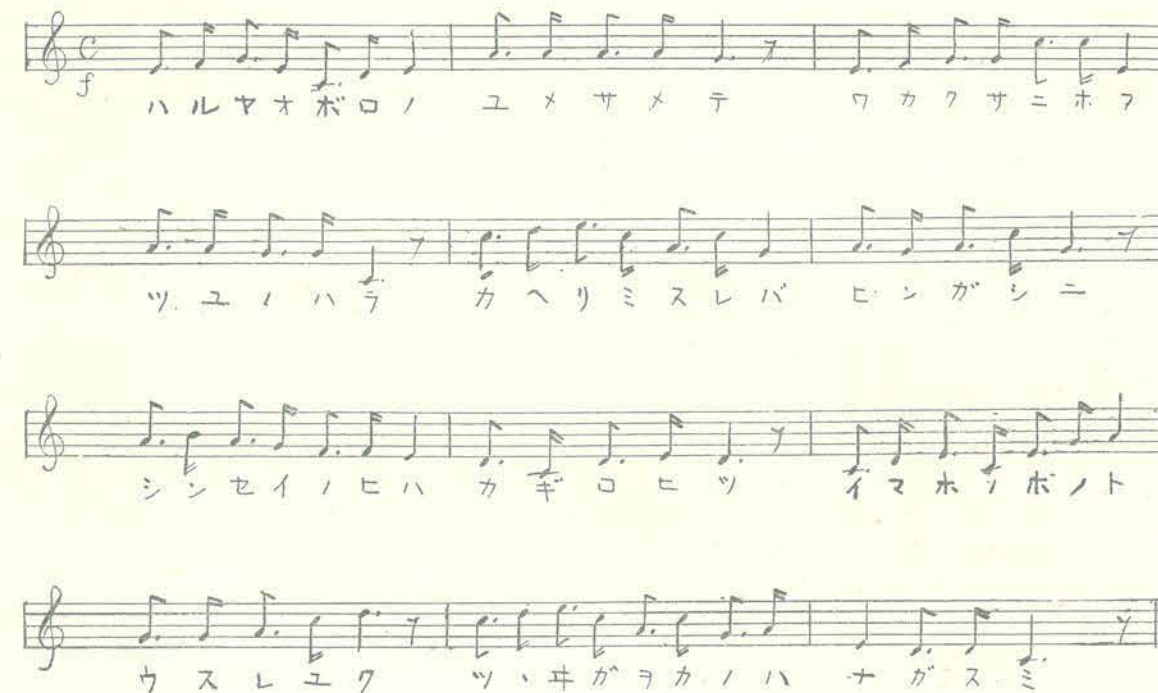
茲に別れの翼を取りて 慈父の徳を頌へまつる 高かりきそのかなり
 若人の胸は 今や大いなる 悲しみに 泣く

(三)

永久に誇らん世人の前に 慈父の正しきそのみ教へ 深かりきそのいつくしみ
 若人の胸は 今や大いなる 光るに びにみつ

我等の歌(道遥歌)

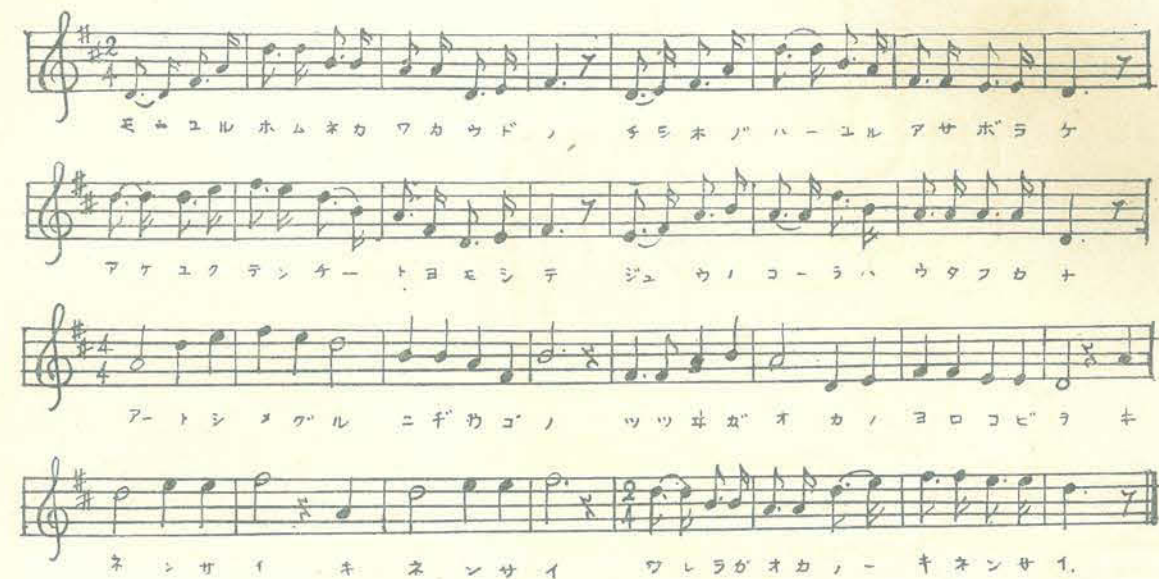
栗田義恵作歌 近衛秀麿作曲



(栗田義恵作歌)

- (一) 春やおぼろの夢さめて 若 艸にほふ露野原 かへり見すれば東に
 新生の陽はかざろひつ 今ほのほのさうすれゆく 筒井ヶ丘の花がすみ
- (二) 西ゆ東ゆ暮ひ来て 相知る魂の喜びに 自由の子らが胸うちて
 高湧く血潮青春の 光榮を謳ふか大摩耶は 嵐狂ふと共鳴りぬ
- (三) さらば不斷にきたへたる 男子はゆけや國遠く ゴビの沙漠の月に臥し
 巴里の都の花に酔ふ 世界の極みここごとに なれを迎へて榮あらむ
- (四) 白 菊 薫る丘の上 仰げば遠く行く雲の おもひほるけき眺めかな
 凭れば囁くユーカリの 高き理想のかげにして 友と語るや未来の譜
- (五) 茅 渚の浦曲の夕風を しづかにかへる漁舟 けふの一日の業終へて
 見渡す秋の空清く さやかに昇る月影ぞ 吾らが永遠の姿なる

創立二十五周年記念祭歌



(栗田義恵君作歌)

(一)

燃ゆる火胸が若人の 血潮ぞ映ゆる朝ほらけ 明け行く天地さよもして
 自由の子等は謳ふかな あゝ年めぐる二十五の 筒井が丘のよるこびな
 記念祭 記念祭 我等が丘の記念祭

(二)

捧ぐる誠熱涙に めれてぞ光る清き瞳^{マエ} 光榮^{ハエ}の歴史を偲ばむさ
 眞摯の子らは集ふかな あゝ傳統の樹の蔭に 追憶の波打たせつゝ
 記念祭 記念祭 二十五年の記念祭

(三)

伸び行く力地に満ちて 五月中ばなさみどりの 大空晴るゝ丘の上に
 千餘の子らは揮ふかな あゝ建設の熱きりて 大學の土耕すま
 記念祭 記念祭 ^{イノチ}生命高鳴る記念祭